

平成 27 年 度 学 校 評 価 書

学校名	兵庫教育大学附属幼稚園
-----	-------------

1 学校教育目標

心身ともにたくましい子どもの育成	○ 健康な体の子ども	○ よく考えて最後までやりぬく子ども	○ やさしく豊かな心をもつ子ども
------------------	------------	--------------------	------------------

2 本年度の重点目標

- | | |
|-------------|---|
| (1) 園運営 | ・園運営が主体的かつ円滑にできるよう、園長のリーダーシップのもと、教員一人一人が明確な目的をもって力を合わせて取り組むよう努める。
・幼児一人一人の特性に応じた適切な指導ができるように、キンダーガーデンカウンセラーのアドバイスも参考に教員間で情報を共有し指導にあたる。
・研究テーマ「協同性を育て道徳性・規範意識の芽生えを培う指導の在り方」の研究をまとめる。
・保護者の保育力を高める「親育てプログラム」を実施し、より効果的な子育て支援事業を推進する。 |
| (2) 教育研究活動 | |
| (3) 他校種との連携 | ・大学との連携では、大学教員を招聘しての研究活動や親子活動、保育活動を計画的に推進し、日々の保育へつなげるよう努める。 |

3 自己評価結果（達成状況）【A：達成している B：概ね達成している C：あまり達成していない D：達成していない】

4 分野・領域ごとの学校関係者評価

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
園運営	○組織運営 ・教員一人一人の主体的な取り組みを促すよう、園長がリーダーシップを発揮し、大学と一体となった園運営を行う。	・各教員が自己目標を定め、常に意識して園運営、学級運営に主体的に取り組めるよう、教員会議の場やその他の場面で機会を捉えながら管理職が指導助言を行った。 ・園務がスムーズに遂行されているかを教員会議等の場において点検するとともに、附属学校運営委員会での審議をふまえながら、園長のリーダーシップのもと、大学と一体となった園運営を行った。 ・年度末実施の保護者による「幼稚園教育アンケート」からも、本園の教育や運営に対して、肯定的な評価が得られていた（集計中）。	B	・今後も園長のリーダーシップのもと、教員会議や園内研修、情報交換等を通して幼稚園全体で保育の質の高まりや、共に学び高め合う姿勢を目指し取り組んでいきたい。 ・各自の視野を広め保育の資質を高めるため、引き続き、積極的に近隣の幼稚園や保育園、他の附属幼稚園等への参観を促したい。	◇園運営についての自己評価は妥当であり、改善の方策も適切である。 ・今後も引き続き園長がリーダーシップを発揮し園運営をすすめてほしい。
	○学年、学級経営 ・目指す各学年や学級の姿に向け、ねらいを明確にし、計画的な環境構成を行う。	・学年経営及び学級経営の方向性や課題を明らかにし、今年度の保育の方針を立てた。学期ごとに振り返り、達成状況や課題をまとめ、教員会議で方向性を確認しながら保育に取り組んだ。 ・学期ごとの学年・学級経営や、行事ごとの振り返りなどの反省や評価を、会議等で検討し、教員相互で保育の質を高める努力をした。 ・朝の打ち合わせ時には、引き続き各担任より本日の保育のねらい及び課題を明確にし、学年担当副担任や他学年の教員とも共通理解を図り、保育を行うとともに日々の振り返りを翌日に生かすよう努めた。 ・各学年に大学幼年教育コースの教員がつき、園内研（保育公開と事後の反省会）を定期的に行い、保育の質の向上に努めた。	A	・今後も教員相互に保育の質を高めていけるよう、互いの保育を見合う園内研を計画的に設ける。大学教員の指導を受ける機会については、学年毎に積極的に働きかけ、定期的な指導を受けられるようにする。	・幼児教育の基本をしっかりと踏まえた保育を意識した近隣のモデル園であるため、より強く発信してほしい。
	○説明責任 ・本園の教育方針や保育の内容については、管理職や担任が機会を捉え、話したり文章にしたりして、啓発していく。	・「ふよっこだより」を年26回発行し、教育方針や園で行われる保育の内容、各行事の主旨・取り組み等を伝え、園の保育や幼児の育ちに保護者の理解が得られるようにした。また、これらを抜粋し、幼稚園HPに掲載し、広く本園の保育についての啓発活動を行った。 ・主な行事ごとに保護者にアンケートを依頼し、保護者の意見や要望をふまえ、行事の成果や課題等を「ふよっこだより」で伝えた。 ・降園時には、各担任から学級の保護者に対して、その日の幼児の姿をもとに、保育のねらいや幼児の育ちを伝えるようにしている。また、副園長が各学級年2回の学級懇談会に参加したり、登降園時に機会を捉えて保護者の意見を直接聞いたり、子育てについての情報を発信したりするなど、保護者に本園の保育や運営について理解を得るようにした。 ・園の教育を理解してもらうため、全学年の保育参観及び保育参加日（「ふよっこデー」）を年7回実施し、保育を見る観点を事前に伝え、当日その場で機会を見つけて保護者に説明をし、理解を得るように努めた。	B	・引き続き、園の教育方針については、園の保育や幼児の姿を通して保護者に十分な理解が得られるように、始業式・終業式後の保護者説明会等年間を通して説明していく。 ・幼稚園のHPで「ふよっこだより」（抜粋）で園内の行事を知らせたり、保育の様子をHPに掲載するなど、定期的に情報を発信していきたい。	・親教育、人間教育は大切である。保護者の多様性をどう指導していくか。一層説明責任を果たし、深めてほしい。
	○危機管理体制の整備及び施設の拡充 ・「附属学校園における安全確保及び安全管理の手引き」に基づき、毎月実施の「子供安全の日」における安全教育への意識付け（避難訓練等）及び施設設備の定期点検とその改善・拡充に取り組む。	・毎月1回「子供安全の日」を設け、避難訓練や学年に応じた安全指導を行った。また、保護者にも共通理解の確認や防災意識を高めてもらうために、手紙を配付した。 ・避難訓練については、不審者対応、火災、地震を想定し、年7回行った。幼児は徐々に身の安全を守る行動がとれるようになってきている。また、職員も臨機応変に対応できるよう、事後に問題点を出し合い、改善点も踏まえて、次回に生かせるように努めた。さらには園単独の避難訓練だけではなく、保護者と連携した引き渡し訓練や、小学校との合同不審者対応訓練、消防署員を招聘しての火災避難訓練も行った。 ・各教員が幼児の怪我や疾病等緊急時の初期対応を適切にできるよう研修したり、消防署員を招いて心肺蘇生法を行ったりした。 ・「附属学校園における安全確保及び安全の手引き」を職員に配付し、周知徹底するとともに、避難訓練毎に詳細な計画書を作成し取組んだ。	A	・避難訓練は、教員が迅速かつ臨機応変に対応することが課題であり、今後も教員の危機管理意識や対応能力の向上のために継続していきたい。引き続き、毎回様々なケースを想定しての避難訓練を継続していきたい。	・避難訓練については、昨年より充実している。今後も連携の重要性を意識し、なお一層危機管理体制を深めてほしい。

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
	○教育活動 ・本園の特色ある取り組みである「うれしのタイム」や学級・学年の活動の中で、「道徳性と規範意識の芽生えを培う」ための指導の在り方を意識する。	・3年間の教育課程をもつ幼稚園として、教育課程を見直しながら3年間の幼児の育ちを見通した保育が行えるよう、各教員間の保育観や子供観の共有に向けて学期毎に点検を行った。 ・本園の「うれしのタイム」の意義をふまえ、幼児の育ちを支える「うれしのタイム」の在り方と、学年学級の活動や行事等との関連について意識しながら取り組めるよう、機会を捉えて教員で話し合う機会を設けた。 ・研究テーマとの関連で、継続して日々の保育の記録を基に事例を収集していった。 ・園行事においては、担当者の計画のもと、行事の主旨やねらい、取り組みの方向について共通理解するとともに、行事後には、保護者アンケートも参考にし振り返りを行い、次年度につながるようにしている。	B	・異年齢交流の場である「うれしのタイム」の活動については、一人一人の幼児にとって二年ないし三年間という期間の中でその子の育ちを見通した保育が行われているのかを機会を捉えて点検していきたい。また、担任と学年担当副担任が連携を取り合い、幼児の実態に応じた遊びの環境や指導の在り方を探っていきたい。	◇教育研究活動についての自己評価は妥当であり、改善の方策も適切である。 ・「うれしのタイム」での体験は生きるための力になり必要であると考えるが、何故必要なのかという視点で見直すことも大事である。
	○幼児理解 ・教員間やカウンセラー・合理的配慮協力員のアドバイスを受けながら幼児一人一人の特性に応じた指導ができるよう幼児理解に努める。	・キンダーガーデン・カウンセラー（以下、K、C）に、各クラス学期に2～3回観察してもらい、個々の幼児に応じた指導方法のアドバイスを受けて、保護者の相談へとつないだりすることで、より個の特性に応じた指導が行えるように努めた。K、Cからのアドバイスが記載された記録を必要に応じて閲覧したり、年3回の全職員参加の園内委員会を開いたりし、情報が共有できるようにした。個別の支援計画は、定期的に見直し、次年度に引き継げるようにしている。 ・就学にむけて、6月と9月に希望進学先調査を行い、必要に応じて各小学校と連絡を取り合い、日常の幼児の様子を見てもらう機会を設け、進学先のスムーズな決定と進学後の適切な受け入れ準備を図った。また保護者からの進学相談には、担任、副園長があたり、就学予定校や教育委員会と連絡を取り合った。 ・一昨年度より、文部科学省のインクルーシブ教育システム構築モデル事業の委託を受け、該当児を定め、合理的配慮の視点からの観察記録を行い、担任と協力員、支援員、K、Cが協力しながらその子にとってのよりよい支援の方策を探っていき、園内委員会においても情報を共有した。また、3年間の成果を三附属合同成果発表会にて、地域の教育関係者に広く発信した。	B	・引き続き、特別支援コーディネーターを中心に、K、Cや大学専門教員のアドバイスを受けながらインクルーシブ教育についての見識を高め、幼児一人一人の理解に努めながら、より効果的な支援が行えるように研鑽を積みみたい。	・一人一人の幼児理解がK、Cとの連携のもと、効果的に行われている。幼児期にその子の個性を見つけ、より効果的な指導をすることは望ましい。 ・個別支援シート（サポートファイル）は加東市のみならず、他市からも連携が取れるように働きかけてはどうか。
教育研究活動	○研究活動 ・保育場面において人とのかかわりに焦点をあて指導していく中で、国立教育政策所教育課程研究指定校事業課題である「協同性を育て道徳性・規範意識の芽生えを培う指導の在り方」を探る。（三年次）	・2年間の研究結果を整理し、「協同性の育ちの姿」と「道徳性・規範意識の芽生えにつながる発達の道筋」を明らかにした。これら研究の成果は、研究紀要にまとめて公表する予定である。 ・3年間の研究の成果として、「道徳性・規範意識の芽生え」は、主体的な遊びの中で様々な体験を積み重ね、力を身につけ培われていくものであること、「道徳性・規範意識」は、協同性が育って行くなかで、培われるものであり、幼児がどのように自分と向き合い葛藤したり折り合いをつけたりしているのかその過程を丁寧に読み取る事が大切であること、さらには、「人とのかかわりの中で道徳性・規範意識の芽生え（心の育ち）につながる体験」を抽出し、その発達の道筋を明らかにしたことで、教師個々が幼児一人一人の発達の道筋から個に応じた教師の関わりを見極め、考えることができるようになった。教師がその子の思いを丁寧に読み取り、共に感じ、支えることを意識化することによって幼児の関わりにも生かされるようになった。	A	・研究の成果に基づき、日々の保育に還元していくとともに、保護者への啓発の方法についても検討していきたい。	・研究活動、生きていくために必要な研究テーマであるので、保護者への啓発方法について検討し、目の前の子供たちへの教育へ結びつけてほしい。
	○子育て支援事業の充実 ・保護者の保育力を高める「親育てプログラム」を実施し、より効果的な子育て支援事業を推進する。	・「親育てプログラム」として「子育てひろば」のスタッフ、「誕生会」「親子活動」「にこにこ子育て講座」を実施し、それらの活動を通した保育参加、保育参観を行った。また、学級毎の「きっすくらぶ」を積極的に働きかけたことにより、定期的な絵本の読み聞かせや音楽遊びに加え、楽器演奏やダンス、触れ合い遊びなどの参加者が見られた。 ・「ふよっこデー」（保育参加や保育参観）では、各学年の保育参加や、親子活動の機会を設け、親子が触れ合ったり共に活動したりする場とした。また、月ごとの「誕生会」では、園長・副園長を交えた懇話会を、数回に分けての「弁当参加」で、担任と話す場を設け、子育てを考える機会であるとともに、限定された人数での参観日とし、ゆったり参観できるようにしている。 ・「子育てひろば」実施後は、「きっすくらぶ」参加者や未就園児保護者からは参加の感想や気付きを収集、抜粋して情報誌「だあいすき」に掲載し、反映させた。これらは、HPにも掲載し、啓発している。 ・次年度預かり保育実施に向けて「兵庫教育大学子ども・子育て支援推進協議会」「預かり保育実施検討専門部会」を立ち上げ、検討を重ねた。その結果、就労支援型預かり保育の実施に向けて準備中である。	A	・「きっすくらぶ」の意義を再認識し、意識して保護者に啓発できるようにしたい。 ・「預かり保育」実施にあたっては、次年度が初年度の実施であり、安全かつ着実に運営することに重点をおきたい。	・「預かり保育」を実施する場所は、園内と分ける方が利用者にとって、気持ちの切り替えができてよいのではないか。 ・PTAと連携した活動についての記載があってもよいのではないか。

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
地域への貢献	○開かれた幼稚園づくり ・地域の未就園児親子参加の「子育てひろば」を年9回実施し、地域、幼稚園、家庭が共に育つ活動を展開する。	・未就園児親子参加の「子育てひろば」を、回数を昨年の9回から14回実施に増やしたところ、年間の登録者数は82組（2月現在）で若干参加者が増えた。活動の前半は「うれしのタイム」で在園児と共に遊び、後半は遊戯室において、各クラス単位で在園児や保護者と共に活動する日（8回）と、園長、副園長による幼稚園紹介、子育てワンポイント、触れ合い遊び（6回）を実施した。 ・幼稚園のホームページに、行事を中心とした保育の様子を定期的に掲載し、地域に向けての情報を発信した。 ・「子育てひろば」に参加している保護者も気軽に子育てや就園の相談ができるよう、園長、副園長が積極的にかかわるようにした（すこやか子育て相談）。 ・子育て支援ルーム「GENK i」と連携し、参加親子に5歳児が歌を披露したり、副園長が「附属幼稚園で大切にしたいこと」をテーマに保護者向けに講話をしたりした。	A	・引き続き幼稚園のホームページに、幼稚園の遊びの様子を紹介し、地域に向けて情報を公開していきたい。 ・引き続き「子育て支援ルーム」（本学就学前教育カリキュラム研究開発室）と連携を取り合い互恵性のある取組みとなるよう努めたい。	◇「地域への貢献」についての自己評価及び改善の方策は概ね妥当である。 ・子育て支援ルーム「GENK i」が充実しているので、今後も連携を図ってほしい。大学の附属園は、大学の教員と連携し理論と実践を結びつけることが可能であるので、幼稚園のHPなどで子育てワンポイントなどを掲載してはどうか。
	○研究発表や公開保育 ・年3回の幼年教育研究会を通して、研究の成果を発表し、地域及び社会に貢献する。	・幼年教育研究会は、県内外の国公立幼稚園・保育所教員、大学教員、大学院生等約50名の参加者を会員として年3回行った。延べ200名余りの参加者を迎えた。 ・第1回（5／30水）と第3回（12／5土）は、公開保育、研究報告、分科会、総括を行った。第2回（8／3月）は、大学の講義室に場所を変え、年齢毎の分科会に大学教員も加わってもらい、研究テーマに焦点を絞り話し合いを深めることができた。 ・第3回の研究発表会は、田園調布大学大学院教授佐伯胖氏を招聘し、講演をいただき、保育への助言や研究のまとめに向けて示唆をいただいた。	B	・引き続き、年に1回は土曜日（または日曜、祝日）開催とし、地域及び社会に貢献していく機会としたい。	・地域に貢献するという意味で、公開保育研究会の土曜開催を1回から2回に増やすことはできないか。
他校種（小・中・高校・大学）との連携	○校種間連携 ・近隣の高校も含めた他校種との交流は、ねらいを再認識し、活動を見直す中で互恵性のある連携活動を行う。	・三附属連携推進協議会において、三附属の教員が各部会（教科等）に分かれ、情報を共有したり、互いの意見を交換し合ったりした。第3回目には、それぞれのインクルーシブ教育の成果を発表し合い、情報を共有した。 ・附属小学校との交流では、5歳児が5年生と11月に、1年生と3月に交流給食を実施した。 ・附属中学校との交流では、4・5歳児と3年生間で、7月に中学生とペアの幼児が遊び、9月には中学生がペアの園児に手作りの玩具を持参し一緒に遊んだ。5歳児は同じペアの生徒と共に「おやじの会」の方が中学校の畑に植えたさつま芋を掘る活動も経験した。 ・県立社高等学校1年生が「触れ合い育児体験」として、学年毎に一緒に遊んだり弁当を食べたり、体育科生徒の集団行動を見たりした。 ・附属小学校2年生の生活科「おおきくなった自分」の授業に、本園職員2名が講師として招聘され、幼稚園時代の様子を映像を交えて紹介する機会を得た。	B	・今後も互恵性のある連携・交流となるように事前の打ち合せや事後の反省会を密に行い、連携活動の質を高めていきたい。	◇他校種との連携（小・中・高校・大学）との連携についての自己評価は概ね妥当である。 ・他校種と交流を行うにあたって、互いの教師にとってのメリットの大きさは？デメリットは何なのか？互恵性のある交流を続けてほしい。
	○実地教育(教育実習) ・改訂されたテキストを生かし、初等基礎実習が効果的な実習となるよう努める。	・一日経営実習の反省会に大学教員が参加し、大学のリフレクション（授業）と連携をもたせ、より効果的な振り返りを行い、次に生かせるようにした。 ・初等基礎実習においては、事前に学生が機会を見つけて園に足を運び、園や幼児と関わり課題意識をもって実習に臨めるように、オリエンテーションを4月と実習が始まる直前の2回行った。 ・引き続き、実習前にテキストをオリエンテーション時に熟読するように促しておき、それを基本に指導講話の内容を具現化させている。 ・引き続き、教材研究、保育研究、幼児理解等の時間を確保できるように、指導案作成はパソコンを使用できるよう環境を整えている。 ・教育実習総合センター長をリーダーに「初等基礎実習WG」を立ち上げ、担当者や管理職参加のもと、初等基礎実習の内容・方法の改善に向けて検討している。	A	・一日経営実習の反省会に大学教員が加わることで、理論と実践が結びついた振り返りを行うことができた。	・実習を経験することにより、就職した際にスムーズにいくので、今後も効果的な実習を期待する。
	○大学との連携 ・大学教員を招聘しての年2回の親子活動や年4～6回の保育活動を推進したり、園内研修会に参加、助言を求めたりするなど大学との連携を密にした取り組みを行う。	・幼年教育系大学教員には、本園職員の保育の質の向上や研究推進のために、定期的に保育を公開し（各学年学期に2回程度）、事後の指導を受けたり、園内研への積極的な参加を依頼し、指導助言を求めることができた。 ・3・4歳児の親子活動（年1回）、4・5歳児の陶芸活動（4歳児2回、5歳児1回）を大学教員指導のもと実施した。親子活動は、それぞれの年齢や発達に合った内容で、親子触れ合いのよい機会となった。陶芸活動は、ここ数年大学キャンパスでの活動が継続されており、本格的な陶芸体験ができた。また、大学キャンパスでの活動が有意義な経験となるよう、自然豊かな大学構内散策や学食で昼食をとる機会も設けた。 ・PTAとの共催で年3回実施した「にこにこ子育て講座」では、大学教員やK.Cによる講義や楽器演奏を聴く機会を得た。 ・大学幼年教育コース教員には、幼年教育研究会のコーディネーターや指導助言者として参加を得た。	A	・大学教員の協力を得、定期的な保育公開を行い、指導を受けることができた。次年度も継続して依頼していきたい。	・大学との連携は、次年度も大いに継続してほしい。